

にほんごであそぼう くげんだいぶんのきそく

第五回 小説①

啓は大企業社長の一人娘であるが、男性を重んじる古くからの考えを持つ父の会社を継ぐため、男勝りな彼女は「男」として育てられてきた。父の右手として働き始め、優秀な「彼」は社会からも認められるようになってきた。あるとき持ち上がった、大事な取引先の跡取り娘の妙子とのお見合いを断ることができず、婚約することになってしまう。順調に妙子との仲を深めていた矢先に、妙子の妊娠が発覚する。

妙子は気分が悪いと言って仕事を休み、テレビを見ていた。天気予報では昼からは雲が広がり、夜には雨が降ることを告げている。洗濯は明日で良いかなと思いつながら横になって、目を閉じた。

しばらくくうとうとしてしていると、部屋の外で物音がする。体を起こすと同時に、控えめなノックの音が聞こえた。父が顔を出し、妙子が起きているのを見ると、ベッドのそばへ駆け寄ってきて、優しく声を掛けた。

「一途で大事にしてくれて、本当によかったな。早めに式を挙げないと。」

妙子はうつむいている。汗が出てくる。

「恥ずかしがらなくてもいいの。」

という父の言葉にさらに何も言えなくなり、違つ恥ずかしさに顔が赤らむのを感じた。

妙子が仕事を休んだという話を聞いて、啓は心配になり、自分の仕事を早めに切り上げた。雨が降り出す前に降りたかったのに、会社を出ると、もう小雨が降り始めている。妙子の家にやってくる、顔をクシャクシャにさせた父が出迎えてくれ、挨拶もそこそこに妙子の妊娠を啓に告げた。啓が喜ぶことを確信しているかのようだ。

電気の付いていない部屋は真つ暗で、強くなってきた雨の音だけが聞こえている。妙子は布団を引き被っている。

「ずいぶんひどいことをするね。最近、違和感はあったけど、でもやっぱり周りの評判もあるから僕なりに大切に生きてきたつもりなんだけど。妙子はどうするつもりなの。」

啓の言っていることが正論すぎて、混乱していて、何かを考えることもできなくて、妙子は何も言うことができない。